

【司会：瀧澤】

私ども私学高等教育研究所主催の公開研究会は、今回が第56回目になります。私は、私学高等教育研究所の主幹をしております瀧澤と申しますが、今日の司会役をやらせていただきますので、よろしくお願いいたします。

今日のテーマは、諸外国における質保証の動向ということで、アメリカ、イギリス、ヨーロッパの3か所を取り上げて、それぞれご専門の先生方から最近の状況についてお話をお伺いしようと思います。

質保証というのは、いま大学改革の最先端のテーマになっていると思いますが、これは日本だけではなくて諸外国共通のことだと思えます。質保証が大学の急速なグローバル化を背景として起こっている問題でもありますし、わが国の認証評価は平成16年に発足をしましたが、やや出遅れの感があったと思えます。

そのため、先行しております諸外国の状況をモデルとして研究を続けてきたわけですが、まずは、アメリカのアクレディテーションが当初のモデルの1つでした。その後、イギリスでは、いわゆるアカデミックインフラと総称されております諸々の枠組み、参考基準等を整備しているという状況等も紹介されまして、イギリスの質保証の仕組みに対する関心が非常に高まってきたと思えます。それから、特に最近では、OECDのAHELOの事業に日本も工学の分野で参加しているということで、これはご承知のように高等教育における学修成果の国際的な比較をやるということですので、その影響もあり、学修成果の重視が質保証の大きな課題になっているのが諸外国の共通的な状況であろうと思えます。

ただ、この学修成果の評価は大変難しいところがあり、諸外国でもいろいろな工夫をしているわけですが、日本の認証評価がどういう方向にいくか、その方向を見極めるのはまだ難しい状況にあると思えます。今、認証評価は7年の第1期を終えてそろそろ安定期に入らなければいけないのですが、未だに新しい問題提起が続いています。

1つは学修成果重視の評価をどうやっていくかという問題です。それから大学の個性・特色に視点を置いた評価をどのようにやるのか、さらに設置認可等を含めた公的

な質保証の一体的運営ということが強調されていますが、これらの課題にどのように対応していくのか、いろいろ難しい問題があると思います。そういったことで、これから認証評価についても検討を続けていかなければならないわけですが、さしあたりは認証評価の国際的な動きというのが、私どもとしては非常に関心事項でありますので、まずは一番大きな影響を受けてきた3地域の現状についてお話をお伺いしたいというのが、本日の趣旨でございます。

趣旨説明は以上にいたしまして、早速本題に入らせていただきます。本日、講演をしていただく先生方は、まずアメリカについては、日本大学の羽田先生と大学評価・学位授与機構の森先生をお願いしております。イギリスについては、神戸大学の川嶋先生、それからヨーロッパについては国立教育政策研究所の深堀先生にお話しいただきます。いずれも活発に発表されている論文等を通じて、すでにご承知いただいている先生方だと思います。

それでは、よろしくお願ひいたします。

【羽田氏】

こんばんは。ご紹介いただきました日本大学の羽田積男と申します。今回は諸外国における質保証の動向ということで、私はアメリカの研究大学の学生調査についてお話をさせていただきたいと思います。

さて、なぜ学生調査かということはこれからお話ししますが、もう1つ研究大学というテーマを掲げています。研究大学というのは、これは定義をするとなかなか難しいことがあるのですが、カーネギー教育振興財団というところがいろいろまとめていまして、そこで使われた用語が現在は一般的に使われていて、**Research University** というふうには一般的には使われております。いろいろと混同があるかもしれませんが、概ね大規模の大学院を持っていて、たくさんの博士号を授与している大学というふうにご覧いただくと良いと思います。

どうして私がこの研究大学を取りあげるかというと、こういう大学は概ね大きな公立・州立の大学が多くて、大きな大学は当然のことですが学生の教育に悩んでいるということでもあります。したがって、そういう点に関して言えば私たちの日本の大学も同じだということで、このテーマにさせていただきました。

まずその学生調査とはどういうものかというと、1つは大学の質保証をするための調査です。あるいは外に向かって大学の存在理由を示すアカウンタビリティのために行うという側面があるように思います。何よりも学生の学習成果(**Learning Outcomes**)というものをしっかり検証することも、そのなかの1つに数えていいと思います。同時にアクレディテーション、アメリカの認証評価とでも言いましょうか、その過程においてもこれが強く求められてきていますので、それを満たすという面でも学生調査が必要だということです。それからもうひとつは、連邦政府の大学教育政策に応える、そういう意味においてもこれは非常に必要なことだというふうに思います。

いま、アメリカで何が問われているかというと、大学ランキングで有名な *US News & World Report* という雑誌が、2013年版において学生のサクセス（成功）ということに焦点が合わせられていると報告しています。たとえば、初年次教育というものが

展開されている。資料のスライド番号3の右のほうに実施している主要な大学名が書いてありますが、ほとんどが名門の大学で大規模大学であります。私立も公立もありますし、もちろん小さい大学もたくさんありますが、今日はあえてテーマ上、大きな大学を挙げておきました。

それから2つ目は、ご存じのインターンシップです。3つ目は **Learning Community** といって、学習社会をつかって、大学を学生が自主的に学習しやすいコミュニティにするということです。考えてみますと資料に **Ohio State** と書いてありますが、**Ohio State U.** は63,000人くらいの学生を抱えていますから、コミュニティと言うのは簡単ですけれども、コミュニティをつくるにはなかなか難しい課題があると思います。

それから4つ目には、**Senior Capstone** と言いまして4年次の仕上げの課題です。日本で言うと卒業論文のようなものと考えていいと思いますが、そういうふうなもので学生を刺激していく、学習をさせるということです。

最近日本でもよく語られていますのが、**Service Learning**。さらに海外留学。そしてもう1つが、学士課程研究・創造的プロジェクトと書いてありますが、**Undergraduate Research** あるいは **Creative Projects** という表記になっておりますけれども、**Harvard**、**Johns Hopkins**、**UC—Berkeley** など、名だたる大学がこれに取り組んでいる。私の今日の話もだいたいこれらのところに収斂していく話になるかと思います。最後は、専門分野のライティングを一生懸命やっている大学です。

いまアメリカの大学が取り組んでいるのは、上の通りであり、その結果、学生のサクセス・ストーリーを作るということになるかと思います。

さて、現在アメリカで展開されている学生の調査というのが、1つは直接的な試験と調査だろうと思います。**NILOA(National Institute for Learning Outcomes Assessment)**という、イリノイ大学・インディアナ大学の研究所がありますが、その研究所によりますと、学生への試験というものにはスライド4ページの3に掲げたようなものがある。これは全部頭文字で内容を詳しく示していませんけれども、皆さんのコンピューターで検索していただければ必ず出てきます。

学生への試験・調査と書いてありますが、試験は学生の能力を直接的に把握するものですから直接的な調査と言ってもいいでしょうね。この調査というのは、どちらかというと満足度調査のようなもので、学生がどういうふうに思うかということを取りあげて、それを土台にして学生の学習をはかろうということになります。つまり、学生の学習を知るには間接的な方法なのです。

先ほども司会の瀧澤先生のほうからもお話がありましたけれども、OECD の AHELO(Assessment of Higher Education Learning Outcomes) なんかもこれから始まろうとしていますけれども、このプログラムの教養教育部門は、アメリカの CAE(Council for Aid to Education)というところが担当することに決まっています。先年、私はここの会長にも会ったことがありますけれども、非常に素早くマーケットをよく見ていて、高等教育の世界を支配すると言ったら語弊がありますが、その世界では指導力を握ってしまうというわけです。

そして、今日取りあげるのは UCwide Survey と書いてありますが、カリフォルニア大学の学士課程生の調査 Undergraduate Experience Survey というプログラムです。当初は、UCUES(University of California Undergraduate Experience Survey) と、称しておりました。カリフォルニア大学というのは、先生方ご承知のとおり 10ヶ所ものキャンパスもありまして、学生も 20 万人を優に超しているのではないかと思います。そういう巨大なシステムをひとつの理事会が擁している。9ヶ所の総合大学のキャンパスのうち、サンフランシスコ校は医歯薬系の大学院課程です。残りの 8 校のキャンパスの学士課程の教育がどうなっているのかというのを調査するために創ったものです。10 番目のキャンパス UC Merced 校は、2005 年の開校です。

その UCUES をもう少し普遍性を持たせて、他の大学でも使えるようにしようというのが、Student Experience in the Research University、頭文字を取って SERU というふうに呼んでいます。開発したのはカリフォルニア大学バークレーの高等教育研究センター(CSHE - Center for Studies in Higher Education)です。かつて、私はそこに 1 年間滞在したこともありまして、このプログラムの開発者もよく知っています

が、そのような理由でこの SERU を取りあげていきたいと思ったのです。

SERU に参加している大学ですが、バークレーの担当者が言うには、SERU は AAU のジョイントのプログラムだと言っています。この AAU (Association of American Universities) というのは、アメリカの優良な大学の集まっている協会でありまして、1900 年にできた協会です。彼らのメンバーはいまアメリカでは 60 大学あって、カナダが 2 大学参加していますが、その 60 大学はアメリカ連邦政府の研究開発費の約 6 割を占めている。あるいは 110 万人の学士課程生を抱えていて、他方で 56 万人もの大学院生を抱えている。アメリカで授与される博士号のかれこれ半分は、これらの 60 の大学で授与しているというわけです。非常に優秀な大学ということになります。

その国内 60 の優良な大学の中で SERU に参加している大学は、カリフォルニア大学のキャンパス、そして Rutgers、リストのなかにラトガース大学がありますが、今日はこの大学を取り上げてお話ししようと思います。他に、Florida、Michigan、Minnesota、Oregon、Pittsburgh、Texas、Southern California は参加大学のなかで唯一の私立大学です。それから North Carolina、Virginia、Texas A&M、Iowa、Purdue、Indiana など、参加大学のほとんどが公立大学です。つまり州立大学です。

そして国際的な参加大学は、なんとといっても、大阪大学が 2013 年に加わるようになりました。ブラジルの大学、それから中国の大学です。それから南アフリカのケープタウンやロシアとか、それからイギリスの Oxford など。つまりだんだんと世界にも広がっていくのが、SERU というプログラムです。

そもそも SERU の課題は何かというと、これは UCUES の時からそうなのですが、やはり大規模な研究大学の学士課程の教育の質はどうかというわけです。どうしても研究大学というのは大規模、大きな Science を扱いますから、規模が大きくならざるを得ないわけです。そういう大学の大学政策とか、学術的な課題に答える、そういうためにも SERU を開発していくということであったわけです。そして 2002 年からカリフォルニア大学の全キャンパスを対象に調査を開始しています。

SERU は、学士課程における学生の研究への取り組みを特に重視しています。つま

り、お話し冒頭で示した学生を成功へと導く学士課程研究・創造的プロジェクトの類です。そして、市民的な取組みやコ・カリキュラム活動の取組み、コ・カリキュラムというのはスポーツとか文化活動、社会的な活動をカリキュラムのように組んでいこうという動きです。それから学生の時間の使い方、学習にいくら時間を費やすかというようなこと。それから学習で獲得したことへの学生の自己報告、あるいは専攻に対する自己評価と大学での経験について満足度を高めるというようなことです。

それからマルチバシティ(Multiversity)というのはあまり聞いたことがないかもしれませんが、昔のカリフォルニア大学の総長のクラーク・カーという人の造語ですが、カリフォルニア大学のような巨大な大学の持つ目的などの多様さを意味します。単一な目的でない複合的な機能を持つ大学をマルチバシティと言ったわけで、そこにおける学士段階の教育は強みもあるけれども、教室が大きくて TA がたくさんいるという問題もないわけではありませんから、そういう学士課程の教育の問題を、そこをきちんと確認するため、把握するためにやる課題だというわけです。

それから政治的な要求に応える。ブッシュ大統領の2期目のときのスペリングさんという教育長官の求めにも応じることになるというわけです。

このような課題のもとに、付加価値を測るために標準テストのようなものを開発し、そしてそれを広く利用しようと、そんなことを課題にしているのが、普遍的なプログラムとしての SERU の概要です。

これからお話しするのは、正式名称で言うと、Rutgers, the State University of New Jersey という古い大学です。アメリカの植民地大学の1つです。幕末・維新时期には日本の留学生は数多くこの大学に行きました。オランダ改革派の大学でしたので、その当時まだオランダ語がキャンパスで通じたというので長崎などにいた学生が留学生となってアメリカに行ったのでしょう。

ところが現在は、州立大学になっていまして、学生数は約 58,000 人です。2013 年 7 月には、ニュージャージー州立医科歯科大学(University of Medicine & Dentistry of New Jersey)と合併することになりました。このニュージャージー州立医科歯科大学と

いうのは州内で唯一の医科歯科大学なのですが、州内の高校生をニューヨーク州やペンシルバニア州の有力な医学部を持つ大学に奪われてしまい、大いなるピンチに陥っていてあまりいい大学になっていません。そういうわけで **Rutgers** と合併して立て直そうということです。

そうするとだいたい6万人近くの大学ができるというわけです。ただ、**SERU** に参加しているのは **New Brunswick** という、いわゆる歴史のある本校のところが対象ですが、それでもだいたいここだけで4万人近くいますので、そのうちの3万人近くが学士課程の学生ということになりますから、かなりの数になります。

この **Rutgers** は、**US News** の大学ランキングで見ると全米で64位です。公立大学では24位ということになります。そしてこの **SERU** に参加している学生、だいたいこの大学では30%ぐらいが **SERU** の調査を受けるということです。

それでは、この学生調査はどういうふうにするかということ、**Rutgers** の場合はいわゆる **IR** 室、つまり **Office of Institutional Research & Planning** のところで実施するということです。これはどこの大学もおおむね同じことだろうと思います。

**Rutgers** は、**SERU** 以外にも **NESSE**、**CIRP**、**MAAP** とかいろいろなプログラムに取り組んでいて、それからさらに教員向けの調査とか職員向けの調査を実施しています。全学的にとっても大きな大学ですから、ありとあらゆる手を尽くしていろいろな調査を展開しているということになります。

実際に **Rutgers** がやっている **SERU** はどんなものかということ、要するにカリフォルニア大学で開発したものを少しアレンジして、つまり **Rutgers** 用にカスタマイズしてやっているのですが、**Part I**、**II**、**III**という出題構成になっていまして、**Part I** では学生の時間の使い方、学生の成長、勉学への取り組み、キャンパスへの順応、大学への満足度、そして教育的経験の評価などです。合計23問で答えを求めています。

基本的に言うと学生の満足度を測る。たとえば授業・主専攻のプログラムについてどう思うかとか、あるいは図書館による学習支援があるかどうかとか、いろいろなことを聞きいています。



それから現在の自分の持っているスキルを自己評価する。たとえば、批判的思考やコミュニケーション能力はどうかというようなことです。わかりやすく言うとコンピューターを使えるか使えないか、研究スキルがあるのかというようなことも聞いています。

あるいは、学修への取り組みです。この **Engagement** とよく使われますが、学問的な参画度あるいは率先度というようなものを測るということです。

**Part II**では、学生の背景、個性です。全 12 問からなっていて、アメリカに何年住んでいるか。すべての学生が生まれつき住んでいるわけではないので聞いてきます。それから主たる使用言語は何かとか、両親の最終学歴は何かとか、所得はどうかとか。これがなかなかアメリカ的だと思いますが、性的オリエンテーションはどうかとか、そういうことを問うわけです。

**Part III**では、自由に選択して答えるようになっているのですが、勉学上の経験、特に **Rutgers** 大学における経験を聞くとか、キャンパスでの活動や組織のどんなところに所属しているか、あるいは政治的行動はどうかとか、いろいろなことを聞く。それから、④番のところは、国際的知識、スキルと認識と書いてありますが、**Rutgers** 大学に入ってからどうかということ聞いています。これはあとからお話しますが、ここのところは非常に細かいことをいろいろ聞いているように思います。それから **Rutgers** における相対的な学習環境の評価はどうか問われています。

そして最後に、学生の学習成果あるいは目標を知っているかというような質問を学生に答えさせている。基本的にはスライド 15 の 2 つ目にあるように、**Rutgers** の学生向けのカスタマイズの制度設計になっているというわけです。この **Rutgers** があるニュージャージー州はニューヨーク州の隣ですので、やはり少数派の学生とか職員や教員がすごく多くて、また国際的なことをいろいろ聞いているというふうに、私には思えるわけです。

あるいは海外留学の場合は、渡航先はどこに行っているかなど詳しく聞いているのが特徴的だと思います。

全部でだいたい 81 問の選択問題がありますので全部は答えないかもしれませんが、私が自分で印字して A4 用紙で 78 ページぐらいありました。これを学生はパソコンから学生番号を使って自分で入力するわけです。だいたい 20 分ぐらいで終わると言っています。本当かな、と私もやってみましたけれども、ちょっと私には厳しいかなと思いました。

実は、この種の調査に対して学生はあまり喜んで参加しないのです。ですからインセンティブを出さなくてはいけなくて、**Rutgers** はそのために全 2,700 ドルの予算があって、抽選で 3 名に 500 ドル相当の何かをあげる。あるいは、75 ドル相当の景品をあげるとか、4 GB の USB メモリーを配ろうとか、だいたいそういうことをどこもやっています。大学によっては旅行券を配るとかをやっています。そのようにして 3 割から 5 割ぐらいの学生に答えてもらうというわけです。**Rutgers** は約 3 割超が答えていますので、全体の 3 分の 1 ぐらいです。カリフォルニア大学ではだいたい半分ぐらい答えていると言っていました。大規模大学では、その調査統計の信頼性を確保するのも大変だと思います。

さて、学生調査をやって何が言えるかということですが、基本的に学生の満足度に近い調査ですから、学生の意見を 1 から 6 までのスケールで測るわけです。スライド 17 以下に示しています。そこで **Rutgers** のスコアと、その右に **AAU** の平均スコアを書いておきましたけれども、授業・コースへの満足度などで言いますと **Rutgers** は見てわかるとおり少し弱い感じですが、これはもう圧倒的に **Rutgers** のキャンパスの大きさによるものだと思います。**New Brunswick** のキャンパスは美しいキャンパスではありますが、学生数の示すとおり巨大であることは免れません。つまり、学士課程の教育はどうしても問題になるのです。

それから、ここは学生自身の現在のスキル・自己評価ですが、ここを見ても全体的に言うとやはり **AAU** のほうが少し高いようです。また、学習への取り組みも高いと読み取れます。

そして、獲得したスキルの自己評価はどうかというと、ここにくるとぼちぼち持ち

直してきたと言えるかと思いますが、しかし、学問的な発達などを見ますと、ここでも少し弱いかなと感じます。

ところがスライド 20 のように、多様性のためのキャンパスの傾向(Climax)、日本語で言うと風土という言葉が当てはまると思いますが、そこへくると少し Rutgers が盛り返してきます。Rutgers が少数派の人たちがたくさんいる、そういう先生もたくさんいる、地域もそういうところだというわけです。したがって少し盛り返しているところもある。個人の信念への敬意は特徴的と言えるでしょう。

というわけで、このような結果が出てまいります。この結果をもとに、自分たちの大学をどういうふうにしていくかということになるわけです。全体的に見てみますと、Rutgers は AAU から比べると 0.1~0.3 ぐらいは少し頑張らなくてはいけないということに多分なると思います。こういうことがわかるというのは非常に良いことです。この AAU の大学ですが、SERU に参加している大学の平均値になります。他の大学も皆大規模です。ですから、この数字をどういうふうに進んでいくかということが大変重要なことです。

こういう SERU のようなプログラムに関してその意見を聞くため、2013 年の 3 月にイリノイ大学の NILOA という研究所に行きまして、Natasha さんというロシア系の研究代表者にいろいろ話を聞きました。この SERU ということはよく知ってまして、この SERU の登場というのは、研究大学対象にしているということはお話ししましたとおりですが、大学ランキングと同じようにやっぱり異なる特性とか異なるミッションを持つ University と College とを分ける、もちろん College だから全て教養教育だけやっているとは限りません。ダートマスカレッジのような大学もありますから、多様ですけれども、University でも研究志向の大学とか、総合性の大学とか、とにかく大学の特性に応じて学生調査を行うということに意義があるのではないかと、あるいは今後はそういうふうな方向に行くのではないかとというふうに彼女も答えてくれました。

そして 2 つ目は、これはだいぶ以前に行っているいろいろな話をお伺いしたのですが、

WASC(Western Association of Schools and Colleges)とって、アメリカ西海岸のカリフォルニアとハワイの大学を対象にしているアクレディテーション団体ですが、こちらの評価基準も数年前まではひとつの評価基準ですべての大学をやっておりました。たとえば、スタンフォードのような大学からスタンフォードのすぐ近くにある学生が100人ぐらいの大学を同じ評価基準でやっていたのです。しかし、それはもう過去のものになりつつあるというわけです。やはり大学の特性に応じて少しプログラム評価基準をカスタマイズしていかないと、詳細な結果が得られないということがあるように思います。

いずれにしてもこのカリフォルニア大学とか **Rutgers** のように大規模で多様な階層の学生からなる研究大学は、大規模大学院といってもいいかもしれませんが、研究が特性ですから、それに着目してこの学生調査を展開する必要があるというわけです。つまり大学の強みである研究をテコにして学士課程の教育を推進するという、そういう方向性にあるのではないかと思います。その結果が、前にもお話しした学士課程研究・創造的プロジェクトというようなプログラムとなっているのではないのでしょうか。

先ほども *US News&World Report* のところでお話ししたように、やはり若いときから研究面において学生を引っ張っていく、本格的な研究に学士課程の学生時代から参加することで学ぶ、そういうふうな仕掛けを創っていくというのが、大学のひとつのあり方だというわけで、それを創るにはやはりこういう **SERU** のような情報がないと、信頼のおける学生調査の結果がないと、なかなか創れないというわけです。

そしてさらに同じような特性を持つ、すなわち研究大学なら研究大学という特性を持つ他の大学との比較がかなり可能になりますから、そうなりますと大学の質保証とか学習成果の向上というものに非常に資することが期待できるというふうに思います。

ただ、いろいろなデータがたくさん挙がってきますから、そのデータをどういうふうに読み解くかということが非常に必要だと思います。特に情報科学のような専門家がやった方がいいというふうにもいろいろとところで言っていました。いろいろな分析

の仕方があろうと思います。いずれにしても、NILOA のインタビューでもそのようなことをお聞きました。そのような答えが返ってきました。

終わりに、Rutgers の学生調査に見るように、大学は自分たちの弱みもさらけ出して、私たちは評価ポイントがいくら低いとか高いとか、そういうのをきっちり打ち出しています。客観的に学生を把握しているように思えます。すなわち、大学の短所も長所もこれによって改めて発見をすることができるということです。

そして、研究大学の学生としてどのように研究に連なっているかも発見している。この研究に連なることは、先ほど *US News & World Report* のところでもお話ししましたけれども、学生のサクセスに焦点が当てられていますから、このことを通して学生がうまくいくよう、成功するように引っ張っていく。これがアメリカの研究大学の問われていることだろうというふうに思います。

そしてこのように大学の特性に応じたプログラムを開発するには、学生調査をやってみないことにはできません。もちろん汎用であちこちにプログラムがたくさんありますけれども、それももちろん使い方でいろいろできると思いますけれども、Rutgers もいくつかの調査を組み合わせさせて使っているわけです。学生調査もあれば試験もあるというふうなことで、いろいろやって学生をあるいは教授陣を、さらには職員を詳細に把握して、そして次のステップにいこうということです。そんなことが多分言えるのではないかと思います。

それから個々の大学の学生調査であっても、他の大学との比較的な検討ができるように、そういうふうにプログラム化されているということは非常に重要だと思います。UCUES の汎用版が SERU で、その SERU は容易に自分の大学用にカスタマイズすることができますので、そういう点では非常にうまくできていると思います。

それからくり返して恐縮ですが、学生調査、学生の試験、複数の調査を組み合わせで大学が今いろいろ進んでいるということも、知っておいたほうがいいかと思います。こうして大学は質保証に向けてその条件整備を行っている、そしてそのことを通して、アカウントビリティを果たしているというふうに言えると思います。

ちなみにこの **SERU** のモットーは、学生たちは個々の意見を持っている。Voice を持っている。個々の学生の Voice は聞き届けられる、というのがモットーです。今日、西安交通大学のホームページを見てみましたが、ちゃんとそのモットーが書いてありました。

そんなことで、この **SERU** というプログラムが今あちこちで受け入れられていくということです。大阪大学もそれに参画して、数年のうちにはその結果も出てくるのだろうと思います。

資料に参考文献を書きましたけれども、ごく身近にあるホームページで見ることができるものばかりですけれども、このようなものを使ってお話をさせていただきました。

以上で私の話を終わりたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。